

## 審査の結果の要旨

氏名 喜始 照宣

創造性やアートの社会経済的重要性への関心が高まっているにもかかわらず、高等教育研究と芸術・美術研究の接合点に当たる「美術教育を通じた作家養成」という主題は、これまで両研究分野において周位的な位置づけを与えられ、美術分野への進路選択、社会化過程、キャリア形成についての実証研究は不十分なものとどまってきた。本論文は、ピエール・ブルデューのディスポジション概念に依拠しつつ、複数の美術系大学の学生に対する質的調査と量的調査を組み合わせることにより、上記の諸課題の解明に取り組んでいる。

上記の問題関心、先行研究レビュー、理論および方法論を示した序章に続き、第1章では美術系大学生の子ども期に焦点を当て、家庭の文化階層は上位であるが多様な経済階層の出身者が含まれること、小中学生期の美術関連の褒賞の蓄積、日常的に制作活動を行うディスポジション、中3時の美術成績の高さを、共通経験として析出した。

第2章では、美術系の高校・大学への進路選択プロセスを分析し、専門美術への憧憬に加え、他者からの役割期待、学力による序列化への違和感、美術系教育機関文化との接触など、社会環境の中での彼らのポジションが進路選択に影響していることを明らかにした。

第3章・第4章では、美大進学者の中で7割以上を占める、大学以前の予備校・画塾経験に焦点化し、その内実と、大学生活への影響を検討することにより、それらが制作技術の指導のみならず美大とその外部との異質さを先行経験させる文化的緩衝材として機能し、大学進学後の制作活動にプラスの効果を発揮していることを見出した。

第5章は、美術系大学の大学生生活を、主に質的調査結果を用いて掘り下げている。学生の語りから見いだされる美大の意味とは、自由な制作のための時間を確保でき、多様な他者や哲学が交錯する環境の中で自らの作家的アイデンティティを見出していく場であるが、同時に教員からの指導・批評の限界が認識されていることが指摘される。

第6章は美大生の大学生生活満足度を従属変数とする統計的解析により、その規定要因はサークル・クラブ活動への加入、授業への興味・関心、友人関係の充実度、将来不安の低さなど美大以外の大学生一般と大きく変わらず、大学というコミュニティ全体の質が重要であることを見出している。

第7章は、美大卒業後の進路選択過程を取り上げ、作家志望の学生の中では、制作のための時間的・空間的・社会関係的資源を確保し作家的アイデンティティを強化するための大学院進学か、進路の実践的模索および社会経験の蓄積のためのアルバイト等従事という進路がメインルートとなっていることが記述される。彼らにとって一般的な就職は、制作の中止・趣味化という否定的な意味づけが与えられており、制作の最優先と経済資本の獲得としての就職との間で不安と葛藤が生じていることが明らかとなった。

結論にあたる終章では、各章の知見が総合されるとともに、高等教育研究および芸術研究への学術的貢献と、さらなる研究課題として美大間の相違、ジェンダー差、卒業後のキャリア形成、国際比較などが言及されている。

本論文は、従来の研究において盲点とされてきた美大生の幼少期から大学卒業期までを複数のデータから統合的に検討し、その固有性と社会的要因を多面的に明らかにしているという点で、明確な研究上の貢献をなすものである。よって、本論文は博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい水準にあるものと判断された。